

川柳に聞く一世・帰米の声： ツーリレーク隔離収容所

衆 井 輝 子

はじめに

ツーリレーク隔離収容所¹への巡礼は、ツーリレーク委員会が主催し、アメリカ独立記念日前後に、隔年で実施される。2016年は21回目の巡礼で、7月1日から4日に実施され、総勢450名を越える参加者を見た。日系人強制収容開始から75年を経ようとするとき、参加者は、世代的にもエスニック的にも多様であったが、巡礼参加の目的は、慰霊であり癒しであった²。

なぜ収容所閉鎖から70年を経た今も癒しが必要なのであろうか。アメリカ合衆国が第二次大戦中に、合法的の日本人居住者および日系アメリカ人市民12万人を、太平洋岸防衛地区から立ち退かせ、内陸部の収容所に収監したことは、1980年の戦時民間人再配置抑留に関する委員会の設置とその後の調査、1988年の市民の自由法成立による国家的謝罪、スミソニアンアメリカ歴史博物館特別展示³などによって、忘れてはならないがすでに解決された問題であるかのように思われる。遅きに逸した感が残るとはいえ、大統領自由勲章が強制立ち退きに違反して逮捕されたフレッド・コレマツに1998年、夜間外出禁止令に抗議するため逮捕されたゴードン・ヒラバヤ

1 ツーリレイク (Tule Lake) の表記は、鶴嶺湖、ツールレーク、ツーリレイクなどの表記がある。強制収容所の日本語表記では鶴嶺湖が主に使われた。

2 <http://gavlonn.com/tulelake/pilgrimage.html>に参加案内がある。参加者には、*Tule Lake Pilgrimage 2016, Our Hallowed Ground, July 1-4, 2016*、参加者名簿等が配付された。

3 “A More Perfect Union: Japanese Americans and the U.S. Constitution” と題して1987年から2004年まで博物館内に展示があった。以後はデジタル展示となっている。

シに2012年、ミノル・ヤスイにも2015年に贈られたこと、9.11事件後のイスラム系住民に対する嫌がらせに対して日系人諸団体が日系人強制収容所の歴史的教訓を注意喚起したことなどを思えば、日系人強制収容所で日系人が受けたトラウマはすでに癒されているかのようにも思われる。

しかし今回の巡礼に参加し、バスの中やミーティングで、参加者の話をきいていると、依然として日系人社会から、「不忠誠者」の集団として白眼視され、戦争に行かなかった臆病者だと蔑まされ、肩身の狭い思いを持ちながら、親たちがなぜツーリーレーキ隔離収容所に入ったのか、その答えを模索する人々がいることを知った。

親は子に話そうとしなかった。子は親に聞けなかった。親が隔離収容所にいたことさえ知らなかったが、何か後ろめたい気持ちを感じて、混乱していたと語る参加者もいた。今になって、親の思いを知り、親の行動を理解したいと思っている。彼らは、親たちが収容所のなかでさまざまな「ガマンの芸術」を生み出したことは知っている。しかし、親たちが残した「声」は、言語の壁で知らない。今回参加した巡礼でのワークショップでは、アメリカに移民した第一世代の一世、アメリカに生まれながらも教育等のために日本に送られ、青年期にアメリカに戻った帰米二世が隔離収容所で残した川柳を読み解きながら、日本語話者であった彼らの声を英語話者である三世、四世に紹介した⁴。

本稿では、最初に、アメリカに対する「不忠誠」者を収容したツーリーレーキ隔離収容所の人々の心情が、他の収容所に収容された人々と比較して、極めて「異端」だったのか、について川柳を通して検証する。続いて、ツーリーレーキ隔離収容所の川柳を事項ごとに考察することで、その生活と心情を読み解いて行く。

4 7月3日午後、“Issei and Kibei Voices: Haiku and Senryu at Tule Lake”と題して、高木（北山）眞理子が俳句を、糸井が川柳を担当した。

ツーリレーキ隔離収容所に収容されたことの意味

ツーリレーキ隔離収容所は、西海岸防衛地区から立ち退かせた日系人12万人を収容した戦時民間人再配置局（War Relocation Authority）が管轄する十カ所の収容所の一つであった。しかし、1943年2月から3月に実施された、いわゆる忠誠登録の結果、忠誠ではないとみなされた人々を収容する「隔離収容所」となった。その結果、この隔離収容所にいたことは、戦後、市民権を蹂躪されながらもなおアメリカに絶対的な忠誠を示した日系人社会のなかでは、獅子身中の虫のように、白眼視された⁵。

果たして、隔離収容所に収監された人々は、日系人社会にとって、一族の恥のような「異端な」存在であったのであろうか？強制収容所で詠まれた川柳に、隔離収容所とその他の収容所との間で、本質的な違いがあったのであろうか。以下、強制収容所内でおきた事件について、隔離収容所から一句、その他の収容所から一句、同じテーマの川柳を二句ずつ選び比較してみた。この比較の後、隔離収容所で詠まれた川柳で、隔離収容所の日常を分析し、被収容者が果たして、毛嫌いされるべき「一族の恥」であったのか考察したい。

市民権と徴兵

1944年、国籍法が改正され、戦時中であっても市民権放棄の道が開かれた。これまでは戦争中の国籍離脱は徴兵忌避を助長するという理由で不可能であった。しかし、今回の改正で、ツーリレーキ隔離収容所の日系アメリカ市民を法的に敵性外国人にすることが可能となった。

5 拙論 “‘Skeleton in the Closet’—The Japanese American Hokoku Seinen-dan and Their ‘Disloyal’ Activities at the Tule Lake Segregation Center during World War II—,” *The Japanese Journal of American Studies*, No. 7, September 1996, 67-102参照。

市民権有無を云はさず片付ける 1944.12.15

追ひ込んで民権までも取る掟 1944.12.15

二つの川柳はどちらも、強制収容所に収監して、アメリカへの絶望感を煽り、そのあげく市民権を取り上げようとする政府の理不尽さを告発している。次の二つは、徴兵を拒否する二世を詠んだ川柳である。

誰が罪ぞ徴兵忌避を出す世相 1944.12.15

戦争の矛盾が生んだ反逆者 1944.11.12

両句とも、徴兵忌避は強制収容とそれに続く諸事件が生み出した、やむにやまれぬ状況が招いた結果だと詠んでいる。後者の句では、責任は戦争であって、誰が悪いというのではない、と響く。アメリカを批判する力は前者よりも弱いように思われる。

徴兵拒否が大きな問題となった一方で、収容所から志願した日系人部隊はヨーロッパ戦線で華々しい活躍を見せた。

百部隊戦史に光る血の誇り 1944.10.20

血の誇戦史へ残る百部隊 1945.10.10

アメリカへの忠誠問題とはかかわりなく、どちらの句も第百歩兵部隊の活躍はアメリカ軍史に輝く偉業であり、日系の誇りだと称えている。

日本について

アメリカに帰化することのできなかった一世は、忠誠登録にいかにかえようとも日本国民であり、天皇の赤子であった。

観るのでは無い拝むのだ菊の花 1944.12.15
一輪の菊花に香る大稜威 1945.07.18

両句とも菊の花が象徴する天皇に対する畏敬の深さを伝えている。そして、戦局を憂い、故郷を案じるのである。

愛国の臉に潤む西の空 1945.04.15
夕焼に胸迫らせる祖国難 1945.07.25

前者の句の、愛国の対象は、西の空という言葉から、日本であることは明白である。後者の句では日本の運命を憂う気持ちは詠まれているが、発表された日付と祖国難という言葉から、忠誠心は日本なのであろう。

手続はしたが帰れぬ船を待ち 1945.04.15
夢に見る迎の船の日章旗 1945.04.15

両句とも日本への帰国を待ち望む想いを詠んでいる。しかし日本は戦争に敗れた。

笑っても見る淋しさ平和晴れ 1945.11.14
青空を仰げど曇る吾が心 1945.09.05

どちらの句も、日本敗戦に対する鬱屈した心境を伝えている。

以上の一連の対句では、最初の句はすべてツーリレーキ隔離収容所以外で詠まれた句である。しかし、二つを並べて比較検討してみると、いずれも、アメリカ政府の理不尽な収容所政策に憤り、徴兵忌避者に同情する一

方で日系部隊の活躍を誇らしく想う。天皇を敬い、戦局の展開を憂う。戦争が終結しても、日本の敗戦に深く傷つき、アメリカの勝利を素直に喜べない。隔離収容所被収容者であるか否かに関わりなく、心情的には、本質的な差異はない。

ツーリレーキ隔離収容所の川柳吟社

ツーリレーキ隔離収容所は最大で2万人弱の収容者を数える規模であったため、同収容所内での川柳活動の全貌を記録に残すことは不可能であったろう。実際に、そうした資料は今のところ確認できていない。とはいえ、戦時中も発行され続けた『ユタ日報』や収容所新聞日本語欄、当時発行され所在が判明している柳誌や記念句集を参考にすると、最大かつもっとも重きをなす吟社は鶴嶺湖川柳吟社であったといえる。竹原白雀、難波桂馬、山本竹涼、瀧川巴水、石川凡才ら、戦前から川柳指導者として一目をおかれていた柳人が名を連ね、定期的に句会を開いていたことは、さまざまな資料に記載されている。山中桂甫、橋本京詩ら若い婦米世代は、鶴嶺湖川柳吟社での活動に加えて、若手主体の筏吟社をつくり、柳誌や記念句集も発行していたという。地域限定型の吟社として、四八区に吟社があったことは、そこで発行された記念句集が現存するので証明できる。この他にも地域限定型の吟社があったかもしれないが、現在のところ、資料的な跡付けはできない⁶。

次に、『ユタ日報』その他の現存する資料から、限定的ではあるが、ツーリレーキ隔離収容所の被収容者が作った川柳を用いて、隔離収容所での生

6 「鶴嶺湖四十八区『川柳』が詠むツーリレーキ隔離収容所の生活」、『白百合女子大学言語・文学研究論集』14号（2014年3月）69-81頁参照。他に、「短歌・俳句・川柳が詠むアメリカ収容所—JICA横浜海外移住資料館所蔵短詩型文学資料紹介」、『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』5（2011年3月）71-89頁；「アメリカ合衆国強制収容所の短詩型文学覚書—『川柳しがらみ』考」、『白百合女子大学研究紀要』49号（2013年12月）57-76頁参照。

活とその喜怒哀楽を探っていく。

柵の中で

強制立ち退き・収容は1942年春から始まっている。収容されるという事態について、

戦争の犠牲となつて収容所 (倉本 1944.06.28 48区⁷)

敵国と云ふ名へ二世も柵の中 (妙祥 1944.08.09 48区)

運命が是非も言はさず柵に入れ (桃林 1944.11.08 48区)

上記の川柳はいずれも、強制収容の理不尽さを詠んでいる。最初の句は戦争だからしかたがないという諦めが、第二の句は、アメリカ市民である二世でさえ敵国人扱いされ市民権が侵害されている事実を、第三の句は日系というだけで問答無用とばかりに強制収容した政府の権力乱用を衝いている。しかし何れの句も、強制収容を批判はするが、その批判はむしろ諦めに近く、断固として抵抗しようとする姿勢は見いだせない。

収容されるということは、どのような重荷を心にかけてたのであろうか。

二度と来ぬ若さを柵に盗まれる (麓民 1944.10.07 怒濤⁸)

人の世の春を忍苦の柵の中 (照子 1944.03.21 48区)

美しい夢は木の葉と散って行き (素子 1944.12.15 比良志がらみ⁹)

7 48区とは、米岡日章『川柳 上下』（四十八区川柳吟社、1945）からの採句を意味する。

8 怒濤とは、鶴嶺湖男女青年団が発行した機関誌『怒濤』からの採句を意味する。『怒濤』は、篠田左多江、山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌集成』全22巻不二出版に復刻出版されている。

9 比良しがらみとは、ヒラリバー収容所で発行された川柳しがらみ吟社の柳誌から採句されたことを意味する。この吟社は、清水其蛸が主宰し、各地の収容所から投句された句が掲載されており、ツーリレーキ隔離収容所からの投句も多かった。

命とはこの世に生きる時間であろう。アメリカの独立宣言は、「生命、自由、幸福の追求」を天与の権利で、譲り渡すことのできない不可侵の権利と謳っている。収容は、この世において自分の意思で時間の使い方を決め、自分の幸せを追求する権利を奪っている。最初の二つの句は、人生の春を謳歌する権利が奪われ、我慢を強いられている辛さを、最後の句は自分の夢を思うがままに追い求めることのできない哀しみを詠んでいる。時間だけがむなしく過ぎて行く、恨めしさ、切なさが伝わってくる。

隔離収容

1943年7月、世論の圧力を受けて、「不忠誠者」を隔離する収容所がつくられることになり、ツーリレーキ収容所がその施設となった。1943年9月から翌年3月にかけて、留まる人、出て行く人、入ってくる人と、人の移動が行われ、警備は厳重になった。

山屏風めぐらしてゐて二重柵 (照子 1944.03.04 48区)

こゝからはもう出られない柵に寄り (貞 1944.08.20 怒濤)

最初の句は、鉄柵が二重となり警備が厳重になった様子を詠んだものである。しかし「山屏風めぐらしてゐて」という言葉で、警備の厳重化がいかにも現実離れしているか、その愚かさを詠んでいる。誰がカスケード山脈の人里離れた不毛の土地から逃げようとするだろうか。「山屏風」のなかに追い込まれ、その上になお、という気持ち「ゐて」という言葉に込められている。二番目の句は、警備の増強を見て、今後の運命がさらに過酷となるのではないかと、と怖れる鬱屈を詠んだものであろう。

立ち退き以来、アメリカ精神の根幹をなすといわれた自由は厳しく制限されてきた。

御自由は此処までと云ふ柵があり (白雀 1944.08.16 48区)
 鉄柵の中に見出す気的自由 (橋本 1944.08.16 48区)
 元日を又も歌つて籠の鳥 (林 1944.01.03 48区)
 硝子戸の蠅硝子戸を開けてやれ (桔梗 1944.11.12 怒濤)

収容所内でもある程度の自由は許された。収容所内では自由に歩き回れた。しかし移動の自由は鉄柵までであった。第一の句はこの事実を詠んでいる。第二の句は、アメリカ政府がこの身を収容所内に閉じ込めても、精神の自由までは奪えないのだ、という開き直りを詠んでいる。第三の句は、収容所生活の長さを、「又も」という言葉で示している。第四の句は、自由を求める切なる気持ちを「蠅」への同情に託している。

上記の句以外にも自由を詠む句は多い。

イエス・ノー選ぶ自由のペンのさき (白雀 1944.08.16 48区)
 区別して裸にされた自由の地 (小鳥 1945.06.15 比良志がらみ)
 潔白の身にも時局が四度指紋 (桃林 1945.03.28 48区)

第一の句には、アメリカ政府に対する詠み手の強い不信感が顕れている。選択は自由だといわれても、選んだ結果はどうなるのか。第二の句は、自由を国是とする国で、差別され、すべて奪われたことを詠んで、アメリカの矛盾を衝いている。第三の句は、審問のたびに行われる指紋採取に、自分は何も悪い事をしていないが、これも時局だからしかたがないと、諦めているようで、「四度」という言葉に、不満が吐露されている。当時の人々にとって指紋採取は、犯罪者に行われるという思い込みがあったろう。繰り返し、繰り返し、四度も指紋採取を繰り返されたことに、諦めとも、あきれとも、複雑な鬱積が読み取れる。

隔離収容所での対立混乱

1943年秋から冬に人々の移動が行われた。隔離収容所では、被収容者人口の急増もあって、衣食住の質が劣化した。加えて、これまでの収容生活では許されていた自治にも制限が加えられ、さまざまな不満が被収容者の間に広まっていた。10月のトラック事故をきっかけに、ストライキが起こり、当局との軋轢が強まった。事態を收拾するために、来所したディロン・マイヤー WRA 長官に交渉を求めるさなかの11月4日に、混乱のなかで「暴動」が起こり、軍隊が導入され、戒厳令が発せられた。

軍装のサーチ気寒い霜の朝	(橋本 1943.12 48区)
初明かりされど戒厳令下なり	(日章 1944.01.03 48区)
哨兵の一発日本まで響き	(大原 1944.08.02 ユタ ¹⁰)
夜の底巡邏兵車の行く響	(玄 ¹¹ 水 1944.08.04 ユタ)

第一の句は、軍隊が導入され、厳しい警戒体制がしかれている様を詠んでいる。「気寒い」とは、気温だけでなく、寒々とした不安な心持ちも詠んでいるのであろう。第二の句は、せっかくの正月なのに、戒厳令下で祝うことも祝う気持ちさえも失せた状況を詠んでいる。第三の句は、事件に対して、日本の政府がすばやく反応し、短波で同情を寄せていることを述べている。アメリカ政府の理不尽さに対して、「祖国」日本への想いが高まっている気分が「まで」という言葉に込められている。第四の句は、戒厳令下で、走り廻る軍隊の車の音に、不安を募らせる被収容者の想いを詠んでいる。

10 ユタとは『ユタ日報』川柳欄からの採句を意味する。

11 ニスイに玄である。

当局との対応をめぐる

強硬か協調か是非に迷ひ (柳陰 1944.11.08 48区)

隣でも維持と打破とで打解けず (桃林 1944.12.20 48区)

現状をいかに解決して行くのか、現在の代表者会にこのまま任せるのか、現状を変えようとするのか、所民一人一人が悩み、今後の方針をめぐる鋭く対立する様を詠んでいる。

こうした混乱のなかでも、多くの被収容者はできるだけ平穏な暮らしをしたいと望んでいた。

叫びたい心をじっと待つ平和 (筑水 1945.04.15 比良志がらみ)

神任せ心静かに待つ平和 (妙祥 1944.08.09 48区)

運命を慰め合つて送る日々 (しづ女 1944.11.20 ユタ)

戦争が止んで欲しいとだけ思ひ (静江 1944.08.30 48区)

敵味方同じ祖先に気は曇り (豊 1945.08.03 ユタ)

最初の句は、大声で不満を吐き出したいが自重し、平和の回復を祈っている。第二の句は、当局や時流に逆らって、ジタバタしても無駄だと達観しているかのようである。第三の句の、「慰め合つて」という言葉からは、忍従の暮らしのなかでも、助け合う慰めが感じられる。第四の句では、日本かアメリカの二者択一ではなく、戦争が終わってほしい、そう願っているだけでは「不忠誠」なのか、という無力さが漂う。同じ仲間なのに、なぜか、という哀しみが第五の句から伝わってくる。

鬱積した心を慰めたのは、皮肉にも収容所の過酷な自然であった。

辛棒をせよとカキタス咲いて見せ (八角 1944.11.12 怒濤)

我慢しろしろとまた、く星明り (弓翠 1945.01.20 怒濤)

何気ないサボテンも、星空も、勇気を与えてくれる。感受性を研ぎ澄ませば、

春の野か土の香がする音がする (素子 1945.04.06 怒濤)

氷割る子等にキラキラ銀の降る (素子 1945.01.20 怒濤)

子を呼べば声を吸込む空の色 (弓翠 1944.11.12 怒濤)

自然は美しい。川柳に対する一般の認識を覆すような、俳句的な句である。春の音とは、氷の溶ける音なのであろうか、堀川の流る音なのか、「土の香」に続くことを考えると、農作業の音なのであろうか。のどかな光景が広がる。第二の句では、「銀」は飛び散った氷の破片なのであろう。子等の歓声と太陽にきらめく氷の破片と、絵本のような光景が目浮かぶ。第三の句は、どこまでも広がる高原の高い青空が思い描ける。いずれも自然詠のようであり、句に人の動きが感じられる。これが川柳の所以なのであろうか。

子等の遊ぶ姿を詠んだ句も多い。

満月の兎へ子等の歌となり (沙汰子 1945.06.18 ユタ)

かくれんぼ子の瞳が丸い節の穴 (竹涼 1945.06.18 ユタ)

徒然に親子の球も春の音 (巴水 1945.06.18 ユタ)

土に座しマールゲーム夢中なり (玄水 1945.06.18 ユタ)

ささやかではあるが、所外でも体験してきた微笑ましい、ホッとすると

時である。

日常性に幸せを見いだそうとすれば、

配所にも初日をろがむ幸があり (照子 1944.01.03 48区)

囀りの窓に明るい俺が朝 (川上 1944.08.16 48区)

鉄柵の中も仰げる碧い空 (日章 1944.11.03 48区)

幸福はこれではないか野を歩き (京詩 1944.11.12 怒濤)

隔離収容であっても、初日の出を拝める。鉄柵のなかでも紺碧の空の美しさに感動できる。野を歩けば、荒野であっても、草や灌木や空や鳥や虫を愛でることができる。第二の句は、収容所の窓に小鳥が囀っている、太陽が光を投げ入れる、このすばらしい朝を誰も奪えないという政府に対する反骨が、「俺が朝」という言葉で表現されている。とはいえ、こうした小さな「幸福」は、収容されるまでは、多くの場合、気にもとめなかった日常の一瞬であろう。「配所」にも「幸」がある、という言葉には、多くを失って初めて気がつく小さな美であり幸である。

日本への想い

隔離収容生活のなかでは、戦前の平穏だった暮らしを懐かしみ、あこがれる気持ちが強くなったであろうことは容易に想像できる。「敵国人」として、「不忠誠者」として隔離収容されているのであれば、平穏な暮らしとは、アメリカではなく、なつかしい日本での暮らしであったろう。望郷の想いは募る。

祖国へと同じ気持ちの両隣	(村田 1944.12.20 48区)
何時船が来るか三度の秋が来る	(水郷 1944.10.15 比良志がらみ)
訊問の度に待たれる交換船	(筑水 1945.04.15 比良志がらみ)
請願の帰国は船を待つばかり	(白帆 1945.07.11 48区)

第一の句は、両隣ともアメリカではなく日本を祖国と選んだことを詠んでいるが、「同じ気持ち」という言葉に、気心が知れた安堵感が漂う。次の三句は、日米戦時交換船を待ち焦がれる想いを詠んでいる。アメリカ政府は立ち退き収容の初期に、不足する交換人員を確保するためもあって、日本への帰国希望を募った。交換船が二度行われ、二度目には収容所からも乗船者が出た。隔離収容所での混乱が深まる程に、アメリカ政府から「不忠誠者」扱いされる度に、こんな収容所を出て日本に帰りたい、普通の生活に戻りたいと切望したことであろう。

日本を「祖国」として帰国できることを待ち望む一方で、二世兵士に対しても想いをはせる。

日系の誠を染めた異国の地	(林 1944.02.02 48区)
忠不忠是非か迷ふ親と子等	(桃林 1944.11.08 48区)
兄隔離弟は米軍に武勲なり	(倉本 1944.11.08 48区)
運命と笑って征った子の便	(弓翠 1944.12.15 比良しがらみ)

第一の句は、ヨーロッパ戦線に斃れた二世の忠誠心に想いをはせたのであろう。第四の句では、徴兵され前線に赴いた子の便りを受けたときの複雑な心境を、「運命」という言葉に託して詠んでいる。第二の句は、忠誠であれば激戦の続く前線へ、不忠誠であればアメリカでの前途は見込めない、親と子の方針の対立が詠み込まれている。第三の句は、同じ兄弟でも、忠

不忠を分けた事例を詠んでいる。アメリカに忠誠を誓わず隔離されている兄は、帰米なのであろう。この句とは逆の事例もあったことであろう。

これらの句が示すように、一家でも親兄弟で忠誠不忠誠の態度は異なった。隔離収容所に収容されている親であっても、その子は出征している場合もある。

断ちものをして出征の子へ祈り (翠風 1945.01.20 怒濤)

千人針頼む矛盾も兵の母 (桃林 1945.03.21 48区)

第一の句では、親は「敵」となった子の無事を祈願している。第二の句では、隔離収容所で、「敵」の兵士のために、千人針を頼み込む母の姿を詠んでいる。「矛盾」という言葉から、この母の普段の言動は、「不忠誠」なのであろう。吾が子の無事を祈り奔走する母の姿を、詠み手は、「兵の母」という言葉で是認している。

そうこうしている間に、1944年12月には集団立ち退き令が撤廃され、忠誠な市民を収容所に収監しておくことは違憲だという連邦最高裁判所による判断も下された。他の収容所の友人からは出所の知らせが次々届いてきたことであろう。1945年1月には西海岸帰還も許された。隔離収容所の被収容者は取り残されてしまう焦りも強くなっていたことであろう。

荒み行く反面涙もろくなり (京詩 1945.03.23 ユタ)

世の進歩遠く眺めて隔離の身 (豊流 1945.05.16 48区)

矛盾した事にも馴れて柵の日々 (日章 1945.03.21 48区)

運命と諦めて待つ平和の日 (桃林 1945.08.01 48区)

鬱積した思いがあれば、少しのことで感情が高ぶる。第一の句はそうした

自分の心を詠んでいる。第二の句は、世の中の変化に取り残される孤独感を「遠く眺めて」という言葉に込めている。それでも、諦めれば時間をやり過ごすことはできる。第三、第四の句は、達観した心を詠む。第四の句の「平和の日」とはどのような日を想像しているのであろうか。

収容所閉鎖

1944年12月17日、集団立ち退き令が撤廃され、翌18日、収容所閉鎖計画が公表された。翌年7月にはツーリレーキ隔離収容所の閉鎖も発表された。しかし、一足早く、他の収容所から西海岸に帰還した人々への暴力事件が報じられる現実をみれば、「不忠誠者」には閉鎖後の「社会復帰」にはなお一層不安があったであろう。

覆水を盆に返へさう帰還令	(白峯 1945.06.18 ユタ)
閉鎖後のそれから先が案じられ	(桃林 1945.07.11 48区)
イエス・ノーまだ迷ってる別れ道	(桃林 1945.07.18 48区)
住む家も無いに閉鎖の日まで定め	(桃林 1945.09.19 48区)
万感を胸に最後のハマの音	(巴水 1945.12.07 ユタ)

第一、第四の句からは帰還令への怒りが、第二の句からは生活再建への不安が、第三の句からは、日本を選ぶかアメリカを選ぶか、まだ決められない迷いが、最後の句からは、さまざまな想いが去来する心が伝わってくる。迷いや不安の一因は、日本の敗戦であった。

東天を涙で仰ぐ平和の日	(豊流 1945.09.05 48区)
空の鳥見よと天上からの声	(巴水 1945.12.07 ユタ)

確かに平和は戻った。けれども報じられるのは廃墟となった日本の姿である。それでもなんとか羽ばたこうと、第二の句は自分を鼓舞している。

泣いていてもしかたがない。事は決した。

再興へ南加の空は晴れ渡り (桂馬 1945.11.14 ユタ)

土の手に誓ふ更生第一歩 (桂馬 1945.11.14 ユタ)

もう過去の未練云ふまい靴をはき (計雪 1945.12.07 ユタ)

第一の句は、「晴れ渡り」という言葉で、奮起を込めている。第二の句は、再び大地を耕して行こうという決意表明であろうか。あれこれ言いたいことは山程あるが、何も言わずに、一步一步歩み続けよう、と第三の句は詠んでいる。

終わりに代えて

ツーリレーク隔離収容所の川柳は、「不忠誠」だとレッテルを貼られた逆境のなかでも精神的強靱さ、柔軟さをもって生き抜こうとした心境を物語っている。川柳は確かにアメリカ政府の収容所政策を批判している。しかし、その批判は抑制が効いており、ときとして隠されている。決して、暴力的抵抗や組織的破壊活動を煽るものではなかった。状況が生み出した「不忠誠」であったともいえよう。